

まえがき

多様な自然環境の中で野生動物（ここでは主に大型陸上哺乳類のことを指す）と付き合いながら、時には野生動物の生きざまに畏敬を感じつつ、その生態を追及することで、新たな野生動物の姿を一つひとつ明らかにしていくことは、本当に楽しく、そのたびに感動を得ることができる。しかし野生動物の野外調査は、苛酷な自然条件下で行われることが多い上に直接観察することもなかなか難しく、思うようには進まない場合がほとんどである。それでも野生動物の調査・研究を進めれば進めるほど、その生態をもっと知りたいという渴望が生まれてくることを、筆者らは繰り返し経験してきた。

筆者らは生態学を基礎として、野生動物と接してきた。一方で、これまでの生態学の教科書に野生動物が出てくる機会は、残念ながら多くはない。多数の先人達が過酷な自然条件の中で、野生動物に対して深い愛情をもちながら様々な調査を行い、すばらしい知見を挙げてきたにもかかわらず、それらが科学論文として公表されてこなかったことがその一因ではないだろうか。成果が時宜を得て公表されてこなかった原因として、野外での野生動物研究に不可欠となる綿密な研究設計の不足があったのではないかと筆者らはつくづく感じていた。そのような状況が、データ取得が一筋縄ではいかない野生動物研究を生態学の枠組みで扱うことに対するためらいへとつながってきたのではないだろうか。しかし近年、野生動物の科学的知見に基づいた保全や管理の要求が社会全般から寄せられ、適切な設計に基づく野生動物の野外調査や、その調査研究を担う者への期待が高まってきている。こうした期待に応えるための一助として、誰もが手にとれる野生動物の野外での生態調査に関する教科書が必要ではないかと感じたことが、本書の執筆につながっている。

本書は、これから野生動物の調査・研究を始めたいという初学者を読者対象としながらも、野生動物に興味のある様々な人に有益な情報を提供できるようにと考えて執筆した。まず第1章では、野生動物の調査・研究に関連する法令

の整理、また野生動物を取り扱う者が常に肝に銘じておかななくてはならない動物の取り扱いの倫理について解説する。第2章では、野外で野生動物の行動観察を行う上で必要な、捕獲に関する情報と野生動物への標識・機材の装着について解説する。第3章ではテレメトリーやバイオロギング（バイオテレメトリー）を中心に、野生動物の行動に関する研究方法と解析手法について解説する。第4章では様々な捕獲個体から科学的データを収集する方法についてを、第5章では野生動物からの生態・生理データの取得方法についてを解説する。最近では、新しい機材の開発や解析方法の発展に伴い、これまでは考えられなかったようなデータを得ることも可能になってきていることから、限られた機会に最大限の情報を入手することが求められる。第6章では「何を、いつ、どこで、どのように、どの程度食べているか」といった、野生動物の食性に関する情報の取得方法や評価方法を解説する。近年は野生動物の資源保全および管理のために高度な知識や技術が求められていることから、野生動物管理への応用的な展開も考慮し、第7章では野生動物の生息環境を評価する方法、具体的には野生動物の生息環境の評価や生存必須資源の量を調べるために用いられる方法の概略を解説する。最後に第8章では、野生動物の個体数がどのように変動するのかとなぜ変動するのかについて、そのプロセスとメカニズムを調べる際や、野生動物の保全と管理を行う際に必要な個体群動態研究手法について解説した。

執筆は、第1～5章を山崎、第6章、第7章を小池、第8章を梶が主に担当した。主な担当章以外にも筆者全員が本書の構成の立案および全章の執筆にかかわり、責任をもって編集作業を行った。また、本文中の「野生動物」という単語は、基本的には大型陸上哺乳類を対象としていることを申し添えておく。本書は主に大型陸上哺乳類を対象に話を進めているが、それぞれの方法や概念は陸上の野生動物全般にも当てはまる点が多いため、ぜひ大型陸上哺乳類以外を調査・研究の対象とする方々にも参考にしてもらいたい。

どのような研究分野でも、研究の最終段階は成果を論文で発表することで、論文発表は科学に不可欠のプロセスである。残念ながら、これまでの野生動物の調査に関して得られた知見の中には、公表されず、情報が野帳やデータシートの中に埋もれてしまったものもあり、無駄に費やされた労力やお金は少なくないであろう。特に、査読付き雑誌への論文発表は野生動物にかかわる者の多

くにとって、おそらく最も難しい作業の1つであろう。しかし、研究はその結果が不特定多数に届くような形で発表されない限り、学問的にはまったく寄与しない。今後、そういった事態を少しでも減らすことに本書が少しでも役立つのなら、うれしい限りである。

本書を執筆、出版するにあたって、多くの方々にお世話になった。生態学フィールド調査法シリーズ編集委員会の占部城太郎氏、日浦 勉氏、辻 和希氏には、本書を執筆する機会を与えていただき、また編集委員として原稿に目を通していただいた。小坂井千夏氏、池田 敬氏には、原稿の内容や表現について有益な助言をいただいた。共立出版株式会社の山内千尋氏には、本当に忍耐強く励ましていただき、編集の労をとっていただいた。ここに、心よりお礼を申し上げる。

2017年6月

著者を代表して 小池伸介